

常識と懐疑

—ヒュームとリードの比較研究—

仙波夏実（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：ヒューム、リード、懐疑論、常識

はじめに

若くして『人間本性論』を著したデイヴィッド・ヒュームは、人間の精神を、ニュートンの科学的視点を応用して解明することを試みた。因果の問題を含めた人間の認識をめぐってその著作において示されたヒュームの立場は、懐疑論であるとされてきた。この懐疑論は、当時の人々には全面的で破壊的なものであると受け取られ、この解釈は後世にも引き継がれることになった。そうした解釈の代表は、トマス・リードである。

同じ時代に生きたヒュームとリードは、後生において真逆の評価を受ける。その要因を作ったのはイマヌエル・カントである。カントは、ヒュームの視点の鋭さを評価し、このことがヒュームを哲学史上輝かしい位置づけを与えた。しかし、リードらスコットランド学派に対しては、ヒュームの問題点を見誤っているとし、彼らは「常識」を振りかざしているだけであると痛烈に批判した。このようにして、哲学史の中でリード及びスコットランド学派の存在は軽視されることになる。

本論文の目的は、2人の思想について、伝統とは異なる視点から比較することで、その共通点や、相違点を探ることである。そのために、まず両者が哲学史的にはどのように捉えられてきたかを振り返る。続いてヒュームに関しては、最終的立場として緩和された懐疑論をとっていたという解釈を採用し、リードについては、本当に哲学者と言えないのか、独自の主張を見ながら検討していく。最後に、両者の思想を構成する異なった背景の1つである、神への信仰や宗教観を取り上げる。

第一章 哲学史におけるヒュームとリード

第一節 懐疑論者としてのヒューム

ヒュームは、われわれ人間の知覚を「印象」と「観念」に還元しようとする。（究極的には、すべては「単純な」印象へと還元される。）すべてのものを印象と観念に還元しようとする彼の姿勢は、懐疑論を招き、外界の存在や因果性の必然性を揺るがした。他方でヒュームは、人間の自由に関しては、そこに必然性があるということを認めざるを得ないとし、いわゆる積極的な自由を否定した。このことも、「強力な懐疑論者」という彼のイメージに拍車をかけたと言えるだろう。

実際に、ヘーゲルは、その哲学史の中で、ヒュームを強い懐疑論者として捉えている。全面的懐疑論者であるとされながらも、人々に大きな影響を与えた点で、次に述べるリードとは、境遇が大きく異なっている。

第二節 通俗的哲学者リード

哲学史を見渡してみると、リードをそもそも取り上げていないものが多く、名前が載っていても、スコットランド学派の一員、あるいはヒュームを批判した人物の1人という扱いがほとんどであり、リード自身についての詳しい説明はあまりなされていない。このことから、後世の人々のリードへの関心は、低かったものと思われる。

なぜリードに対する関心は低いのか。その理由としてまず考えられるのは、すでに述べたカントによる評価である。カントによれば、リードを含めたスコットランド学派によるヒューム批判は、問題点を間違えている。さらに彼らの理論には、自らの依拠する「常識」を批判的に吟味する視点を欠いていると、批判した。確かにリードは、「常識の原理」に反することは不合理であると述べており、カントの指摘にあるような、「常識」に頼り切っていると捉えられるような姿勢を確認できる。このようなカントの批判の影響は大きく、ヘーゲルは哲学史の中でリードを「通俗哲学者」とであると紹介している。（この他にも、リードの哲学が、認知心理学との分離ができていなかったために、不純な哲学であると見なされたことにも原因はある。）

こうして、哲学者らしくないという烙印を押されたリードは、ヒュームのようにその人生に影響するほど反発を受けたわけではないが、後の世代ではあまり取り上げられることの無い哲学者となってしまったのである。

第二章 2人のまなざしの違いと共通点

第一節 ヒュームの懐疑論に対する新しい見方

では、ヒュームは本当に全面的で強力な懐疑論者だったのだろうか。久米によると、懐疑論には「規模」の大小や「程度」の強弱によって色々な種類が考えられるが、ヒュームの懐疑論は、確かにこの中で最大で最強のものであった。

しかしながら、ヒュームはこの「全面的懐疑論」の限界を示し、日常の前では無力であるという主張をしている。さらに、「全面的懐疑論」は、日常だけでなく、哲学的探求の行く

手をも阻むという点で、不利益であるとしている。

久米によれば、代わりに、最終的立場としてヒュームが主張するのは、「緩和された懐疑論」である。ヒュームは実際に、『人間本性論』、『人間知性研究』において「適度な」「穏和な」という表現を用いている。つまり彼の立場は、「迷信」や「偽りの純正ならぬ形而上学」を否定するという意味では懐疑論であるが、その程度は「全面的懐疑論」よりも緩く、日常生活と相反しないものなのである。「緩和された懐疑論」が探究を適度に制限することによって、ヒュームが推し進める「実験的推理法」の手助けとなるのである。

ヒュームが制限しようとした「迷信」や「偽りの純正ならぬ形而上学」とは、理性を越えていることについて、理性を持って探求しようとするのである。ヒュームは、破壊的な懐疑論によって考えることを諦めたのではなく、むしろ、正しく制限された探求を奨励し、その姿勢は前向きなものだったのである。

第二節 伝統とは異なる両者の違いとリードの哲学的営み

他方、リードは、本当に通俗哲学者に過ぎなかったのだろうか。結論を先取りして言うなら、ヒュームとリードの違いは、哲学者と非哲学者という形で捉えるべきではない。両者の違いは、人間の精神を自然と同じように扱えるか否かという哲学の出発点にあった。ヒュームは自然と同じように人間の心を扱ったが、リードは別のものだと主張したのである。

リードは、ヒュームが認めた「粒子哲学のメタファー」を拒否した。このメタファーは、人間の精神を、要素から成り立つと捉える考え方であり、知覚を印象と観念に分け、さらに単純なもの複雑なものに分けたヒュームの思想に示されている。リードにとって、人間を物理世界と全く同じように探究するこのような姿勢は認められなかった。ヒュームとリードは共にニュートンから大きな影響を受けているという点で共通していたが、そこから2人が吸収したものは異なっていたのである。

それでは、リードの独自の哲学とはどのようなものだったのだろうか。やはりその根底には、カントや後世の人々に軽んじられてしまった「常識」があった。リードの言う「常識」とは、人類共通の感覚 (common sense) であり、私たち人間の「オリジナルかつ自然な判断」を生み出しているものである。リードは、この「常識」を探求するためには、険しい道のりだが真理に通じる「反省の方法」が必要だとした。これに対するのは、「類似の方法」であり、人々が採用しがちであるが、信憑性が高いとは言えない方法である。

リードはこのような「常識」をもとにして、ヒューム、ロック、バークリーら観念学説を批判する。心の中のイメージそれだけを採用したヒュームらの観念学説の立場は、リードの目には「常識」に反し、強力な懐疑論を導く危険なものだと映ったのである。

また、リードは、人間の意志は完全に自由であったと主張

していた。この態度は、先述したヒュームのものとは正反対であり、ここにも人間の心をどのように捉えていたのかという点で両者の違いが表れている。

第三章 人間の精神と神の存在

第一節 ヒュームの宗教観と信仰

ヒュームの宗教観は、かなり冷静なものであった。そもそもヒューム自身、信仰を若い頃に失ったとされている。また、ヒュームが宗教を扱った著作『自然宗教に関する対話』で題名の通り対話篇の形をとったのも、宗教問題が情熱をもって語られることを避けたためである。

この著作において、ヒュームの主張を代弁しているとされるフィロは、神の存在について、自明の真理であり、異論の余地はないという主張を受け入れる。無神論者とも言われたヒュームだが、神の存在自体を否定していたわけではなかった。しかしそれにもかかわらずフィロは、神の本性を探求することは人知を越えており、人間の能力に限界があることを主張している。

第二節 リードの信仰

他方で、リードは敬虔なキリスト教徒であった。人間を囲む自然は神によって美しくデザインされたものだと捉えていた。しかし人間については、動物と共通する能力があることを認めるものの、人間独自の能力もあり、それは文化によって成長させていくものだと考えていた。リードにとって、人間に「自然かつオリジナルな判断」を可能にさせる「常識」は、神が生み出した自然が人間に与えるものであったが、それだけではなく、人間は自然から逸脱した存在であり、人間自身によって成長できるとリードは考えていたのである。

結論

ヒュームとリード、2人の哲学者は、どちらも実験的な方法を人間本性の探究に適用しようと試みた。また両者とも、人間の知性を越える探究をよしとしなかった。しかし、ヒュームが適度な懐疑論によって探究を制限しようとしたのに対し、リードは「常識」を疑うことを拒否した。このような2人の違いには、異なった神へのまなざしが関係していたと言えるであろう。

主要参考文献

- カント『プロレゴメナ 人倫の形而上学の基礎づけ』(土岐邦夫訳、中央公論新社、2005年)。
- 久米暁『ヒュームの懐疑論』、岩波書店、2005年。
- 長尾伸一『トマス・リード 実在論・幾何学・ユートピア』、名古屋大学出版会、2004年。
- ヒューム『人性論(一)』(大槻春彦訳、岩波文庫、1948年)。
- ヒューム『人間知性研究』(斎藤・一ノ瀬訳、法政大学出版局、2004年)。
- リード『心の哲学』(朝広謙次郎訳、知泉書館、2004年)。